

はじめに

フランスの作家ヴァレリー・ラルポー Valery Larbaud (1881-1957) は、世界中から保養客の集まるフランス中部の鉱泉保養都市ヴィシー¹⁾ に生まれ、「万国博覧会よりもなお国際色豊かな²⁾」コレージュで学園生活を送り、弱冠17歳にしてヨーロッパを一周し、外国への旅と滞在を常とした、まさに典型的なコスモポリタンであった。

このような作家ラルポーは、自身のスケールをさらに何倍にも拡大したコスモポリタン、バルナブースを創造する。この人物は南米チリに生まれ、アメリカ合衆国で育ち、ロックフェラーやカーネギーらの大富豪に匹敵する父親の財産を相続して、ロシアからヨーロッパを遍歴するのである。このような特異な青年バルナブースを主人公とする『裕福なアマチュアの詩』 *Poèmes par un riche amateur* (1908)³⁾ 一作をもって、ラルポーは20世紀初めのコスモポリチスム文学の旗手となったのである。

だが、こうした事実に加え、ラルポーのコスモポリチスムを考える上で重要なのは、彼がたぐいまれな語学力に恵まれていたという事実である。すなわち、彼は英語とスペイン語をほぼ意のままに使いこなすことができた。そしてイタリア語がこれに次ぎ、ドイツ語、ポルトガル語、ルーマニア語、ロシア語も解した。もちろん、ギリシャ語、ラテン語にも堪能だった。まさにラルポーは、同時代に並ぶ者のない語学の達人 (polyglotte) だったのである。

そして、こうした並外れた語学力にも支えられて、ラルポーはこれまたたぐいまれなる読書家であり、広くて深い文学的教養の持ち主であった。彼ほど「罰せられざる悪徳」たる読書⁴⁾ に耽った者も少ないに違いない。彼の生前の蔵書はヴィシー市立ヴァレリー・ラルポー・メディアテークに所蔵されているが、そこには1万5千点を越える国内外の書籍や雑誌等が含まれるという⁵⁾。

こうした広範な読書と該博な知識に基づき、そして稀有の語学力を駆使して、ラルポーは1914年3月から同年8月まで、ロンドンの週刊誌 *The New*

Weekly に隔週で「パリ通信」「Letter from Paris」を寄せ、直接英語で書き下ろした記事によって、フランス文学・文化に関する最新の情報をイギリスに伝えた。スペイン語でも同様に、アルゼンチンの日刊紙*La Nación*に、1923年1月から1925年12月まで月1回のペースで、古今のフランス文学についての記事をスペイン語で寄稿したのである⁶⁾。

だが、このようにラルポーはフランスの作家や文学に関して外国に向けて情報発信を行うだけでなく、当然のことながら、翻訳、批評、講演等を通して諸外国の作家や文学をフランス国内に紹介することにも誰よりも熱心に取り組んだ。ラルポーの作品集であるガリマール社の「プレイヤッド叢書」の一冊、*Œuvres*の巻末に付された著作目録によって数え上げてみただけでも、彼が翻訳や批評等で扱った外国人作家・詩人等の数は70名余りに達するのである。彼は詩や小説の創作と並行して翻訳や批評の仕事に取り組んだわけだが、全体として見れば、後者の仕事の量が前者のそれをはるかに上回っている。ラルポーは、フランスと諸外国の文学をつなぐ架け橋、すなわち「文学の仲介者」として巨大な足跡を残したのである。

本書は、ヴァレリー・ラルポーの残した外国文学に関する翻訳や批評の主要なものを取り上げて検討し、「文学の仲介者」としてラルポーの果たした役割とその意義を具体的に明らかにすることを目的とする。

以下のIでは、「現代の翻訳者の真の王⁷⁾」とも評されるラルポーの翻訳をめぐる言説について考察する。そして、IIからVの各章においては、それぞれウォルト・ホイットマン Walt Whitman (1819-92)、ジェイムズ・ジョイス James Joyce (1882-1941)、サミュエル・バトラー Samuel Butler (1838-1902)、そしてアルゼンチンのリカルド・ゲイラルデス Ricardo Güiraldes (1886-1927) やメキシコのアルフォンソ・レイエス Alfonso Reyes (1889-1959) などのラテンアメリカの作家たちに関するラルポーの仕事を順次取り上げ、それらの内容を具体的に検討、分析した上で、その意義を明らかにしたい。もちろんこれまでに、「文学の仲介者」としてのラルポーに関わる研究がいくつか公にされてきたことも事実である⁸⁾。だが、それらは多くの場合、ラルポーと外国人作家

との関わりや交流等の事実関係に関する調査研究に留まり、ラルポーの行った翻訳や批評にまで立ち入った考察を加えてはいない。

上記のように、本書は、翻訳や批評等、ラルポーが「文学の仲介者」として行った活動を扱うものであるが、詩や小説等の創作作品と同様に、彼の翻訳や評論等にも紛れもなく彼の文学的個性が刻印されているはずである。したがって、本書はおのずと一個のラルポー論ともなるであろう。

【注】

- 1) ラルポーの短編集『幼なごころ』*Enfantines* (1918) に収められている「包丁」*«Le Couperet»* の次の一節は、ラルポーの生地ヴィシーの町の雰囲気伝えてくれているものと思われる。「この町は春に目覚め、夏の間中プラタナスの木陰で生きる。この町にいと、まるで外国に来たかのような印象を受ける。通りでは人々は聞き慣れない言葉を話しているし、夜になれば、煌々と照らされた家々のテラスでナポリ人たちがラ・フランチェーザを歌うのだ。」(Valery Larbaud, *Œuvres*, «Bibliothèque de la Pléiade», Paris, Gallimard, 1958, p. 424.)
- 2) ラルポーの小説『フェルミナ・マルケス』*Fermina Márquez* (1911) に見られる表現 (*Ibid.*, p. 310.)。なお、この作品の舞台となっているパリ近郊のコレージュ・サン・トギュスタンは、ラルポーが1891年から94年までの3年間、寄宿生活を送ったコレージュ・サント・バルブ・デ・シャンがモデルとなっている。このコレージュ在学中に彼が叔母に書き送った手紙には、パリやアミアン出身のフランス人生徒たちに混じって、ポートサイド、グアテマラ、ボンベイ (ムンバイ)、ハイチ、トリポリ、ブラジル、ベルリン、アラスカ等の出身の友人名が多数記されている (G. Jean-Aubry, *Valery Larbaud : sa vie et son œuvre*, Monaco, Rocher, 1949, p. 18.)。
- 3) この作品は、5年後に『A. O. バルナブース全集』*A. O. Barnabooth, Ses Œuvres complètes, c'est-à-dire : un conte, ses poésies et son journal intime* (1913) に改作される。なお、両作品の異同や改作の事情等に関しては、拙著『1920年代パリの文学——「中心」と「周縁」のダイナミズム』、多賀出版、2001年、9-25頁を参照されたい。
- 4) ラルポーは、アメリカ生まれのイギリスの批評家ローガン・ピアソール・スミス Logan Pearsall Smith (1865-1946) のエッセイ集『文反故』*Trivia* (1918) 中の「慰め」“Consolation”にある一句を借用して、「この罰せられざる悪徳、読書」*«Ce vice impuni, la lecture»* という文章を書いている (*Commerce*, Cahier I, été 1924に掲載)。ラルポーはこの表現がよほど気に入ったらしく、翌年、英語圏文学関係の主要な評論を一冊にまとめる際に、この文章を巻頭に収めて、『この罰せられざる悪徳、

読書：英語の領域』*Ce vice impuni, la lecture : Domaine anglais* (1925) と題した。さらに、フランス文学関係の評論をまとめる際にも、同様に『この罰せられざる悪徳、読書：フランス語の領域』*Ce vice impuni, la lecture : Domaine français* (1941) と題して刊行した。

- 5) ヴィシー市立ヴァレリー・ラルポー・メディアテーク・ラルポー博物館のホームページ (<https://www.ville-vichy.fr/decouvrir-et-sortir/culture/musees-vichy/musee-valery-larbaud>) による。2017年6月15日閲覧。
- 6) これらの外国の雑誌や新聞への寄稿記事のいくつかは、後にフランス語に直されて、上記の『この罰せられざる悪徳、読書：フランス語の領域』に収録されている。
- 7) Edmond Cary, *Les grands traducteurs français*, Genève, Librairie de l'Université Georges & C^{ie} S.A., 1963, pp. 112-113.
- 8) たとえば、Ortensia Ruggiero, *Valery Larbaud et l'Italie* (Paris, A. G. Nizet, 1963)、Bernard Delville, *Essai sur Valery Larbaud*, («Poètes d'aujourd'hui», Paris, Seghers, 1963)、Frida Weissman, *L'Exotisme de Valery Larbaud* (Paris, A. G. Nizet, 1966) などがあげられる。

文学の仲介者ヴァレリー・ラルボー

ラルボーとホイットマン、バトラー、ジョイス、ラテンアメリカの作家たち

目 次

はじめに	i
I ヴァレリー・ラルボーの翻訳論	1
1 聖ヒエロニウムスへのオマージュ	2
2 ラルボーの翻訳理念と翻訳原理	3
(1) 1930年代までの翻訳論	4
(2) 1930年代以降の翻訳論	
—『聖ヒエロニウムスの加護のもとに』第2部を中心に	5
3 ラルボーの翻訳論の評価をめぐる	10
II ヴァレリー・ラルボーとウォルト・ホイットマン	16
1 ラルボーのホイットマン発見	16
2 ラルボーのホイットマンに関する批評	18
(1) 二つの小論考	18
(2) 『ウォルト・ホイットマン選集』の「研究」	21
3 ラルボーのホイットマンに関する翻訳	25
(1) 訳詩「眠る人びと」« Les Dormeurs »	25
(2) 散文の翻訳	36
4 バルナブースとホイットマン	39
(1) バルナブースの閲歴	39
(2) バルナブースの文学観とホイットマン	42
(3) バルナブースの詩と「カタログ手法」	45
(4) バルナブースの自由詩	49
III ヴァレリー・ラルボーとサミュエル・バトラー	62
1 ラルボーのバトラー発見	62
2 ラルボーのバトラーに関する批評	63
(1) 最初の論考	64
(2) その他の論考	69
3 ラルボーのバトラーに関する翻訳	76

IV	ヴァレリー・ラルポーとジェイムズ・ジョイス	89
1	ラルポーとジョイスの出会い	89
2	ラルポーのジョイスに関する批評	93
	(1) ジョイスに関する講演	93
	(2) 他の論考など	106
3	ラルポーと『ユリシーズ』の翻訳	108
	(1) ラルポーとフランス語訳『ユリシーズ』	108
	(2) ラルポーによる『ユリシーズ』のフランス語訳	110
V	ヴァレリー・ラルポーとラテンアメリカの作家たち	120
1	ラルポーとラテンアメリカ文学の出会い	120
2	ラルポーとリカルド・ゲイラルデス	123
	(1) ラルポーとゲイラルデスの出会い	123
	(2) ラルポーのゲイラルデスに関する仕事	125
3	ラルポーとアルフォンソ・レイエス	134
	(1) ラルポーとレイエスの出会い	134
	(2) ラルポーのレイエスに関する仕事	138
4	ラルポーのホルヘ・ルイス・ボルヘス論など	143
	あとがき	152
	主要参考文献等	154
	初出一覧	168

〈 凡 例 〉

- ・ 本文で引用した文献の日本語訳は、断りのない限り、すべて引用者による。
- ・ 引用文中、傍点で強調されている箇所は、断りのない限り、原文のままである。
- ・ 引用文中、引用者による補足は〔 〕で示した。
- ・ 引用文献および参考文献のうち、書籍については、著者（编者）名、書名、出版地（日本の場合は省略した）、出版社名、刊行年等をこの順で記した。また雑誌論文等については、著者名、論文題目、雑誌名、巻号数、発行時期、ページ数等をこの順で記した。なお欧文文献については、書籍、雑誌論文等とも、それぞれ上記の項目の間をコンマで区切った。

文学の仲介者ヴァレリー・ラルボー

ラルボーとホイットマン、バトラー、ジョイス、ラテンアメリカの作家たち

I

ヴァレリー・ラルボーの翻訳論

前記の通り、II～IVの各章において、ヴァレリー・ラルボーのアメリカ詩人ウォルト・ホイットマン、イギリスの作家サミュエル・バトラー、アイルランドの作家ジェイムズ・ジョイスに関する訳業を取り上げるが、これらの作家に加えて、彼が翻訳を行った英語圏の作家や詩人は、アーノルド・ベネット Arnold Bennett (1867-1931)、ギルバート・キース・チェスタトン Gilbert Keith Chesterton (1874-1936)、サミュエル・テイラー・コールリッジ Samuel Taylor Coleridge (1772-1834)、ナサニエル・ホーソーン Nathaniel Hawthorne (1804-64)、アーチボルド・マクリーシュ Archibald MacLeish (1892-1982)、イーディス・シットウェル Edith Sitwell (1887-1964)、ロバート・ルイス・ステューブソン Robert Louis Stevenson (1850-94)、フランシス・トムソン Francis Thompson (1859-1907) など、多数にのぼる。だが、翻訳者ラルボーにおいて特筆すべきは、彼の翻訳の対象が英語圏にとどまらず、さらにスペイン語圏やイタリアにも広がっていたことだ。すなわち、Vで取り上げるアルゼンチンのリカルド・グイラルデスやメキシコのアルフォンソ・レイエスなどのラテンアメリカの作家たちに加え、彼はラモン・ゴメス＝デ＝ラ＝セルナ Ramón Gómez de la Serna (1888-1963) やガブリエル・ミロー Gabriel Miró (1879-1930) などのスペイン人作家、そして、リッカルド・バッケッリ Riccardo Bacchelli (1891-1985)、エミーリオ・チェッキ Emilio Cecchi (1884-1966)、ジャンナ・マンツィーニ Gianna Manzini (1896-1974) などのイタリアの詩人や作家たちの作品をも翻訳したのである。

以上のようにラルポーの翻訳者としての仕事を概観してみると、先に紹介した「現代の翻訳者の真の王」という評価もなるほどとうなずける。本章では、ラルポーの個々の訳業の検討に先立って、翻訳者ラルポーの翻訳観や翻訳をめぐる言説について、彼が残した翻訳論集『聖ヒエロニュムの加護のもとに』*Sous l'invocation de saint Jérôme* (1946) を中心に考察してみたい。

1 聖ヒエロニュムスへのオマージュ

さて、ラルポーの翻訳論を収めた前記の『聖ヒエロニュムの加護のもとに』の書名に含まれている「聖ヒエロニュムス」(saint Jérôme) とは、言うまでもなく、初期キリスト教の教父であり、聖書のラテン語訳である『ウルガタ』*Vulgata* を完成させたエウセビウス・ヒエロニュムス Eusebius Hieronymus (348頃-420) のことである。ラルポーの『聖ヒエロニュムの加護のもとに』の第1部「翻訳者たちの守護聖人」*«Le Patron des Traducteurs»* —— 初出は*Commerce*誌1929年秋号—— は、まさに「現代の翻訳者の真の王」であるラルポーが、「翻訳者たちの守護聖人」であるヒエロニュムスに捧げたオマージュに他ならない。ラルポーは、『ウルガタ』を含むヒエロニュムスの事績を明らかにしつつ、彼が「ヘブライ語の聖書を西洋世界にもたらし、エルサレムとローマ、そしてローマとロマンス諸語のすべての人々、あるいはその言語体系にラテン語の単語や表現—— それらは多くの場合、『ウルガタ』中のものであったり、『ウルガタ』の最もよく知られた節とともに慣用化したヒエロニュムスの単語や表現なのであるが—— を加え入れたすべての人々をつなぐ大きな架け橋を建設した¹⁾」と述べる。そして、「他のどんな翻訳者がこれと同じことをしたであろうか？他のどんな翻訳者がこれほど巨大な企てを、これほどの大いなる成功と、これほどの時空の広がりをもつ影響を伴って達成し得たか？²⁾」と述べて、ヒエロニュムスに対し、この上ない賛辞を呈するのである。

このようなヒエロニュムスの存在を最も輝かしい事例として、ラルポーは、翻訳者の活動が自国の文学や文化の発展に貢献する知的営為であることを確信し、同じ文章の中でこう述べている。

翻訳者は自らの知性を豊かにすると同時に、自国の文学をも豊かにし、自らの名を名誉あるものとする。ある言語、ある文学の中に別の文学の重要な作品を移し入れるということ、これはさえない卑しい企てなどではないのである³⁾。

しかるに、翻訳者のこうした価値ある企てははたして正当に評価されているだろうか。実は、ラルポーはこの文章の冒頭において、以下のように翻訳者の地位の低さを慨嘆していたのである。

翻訳者は軽んぜられている。彼は最下位の地位に置かれている。言うならば、他人のお情けだけにすがって生きているのだ。彼は最も取るに足りない機能、最も控え目な役割を果たすことを受け入れている。「奉仕すること」が彼の信条であり、自らのためには何も求めず、彼が選んだ主人たちに忠実であることのみを名誉とし、自らの知的人格を無にするまでに忠実であろうとするのである。彼の存在を無視すること、彼にまったく敬意を払わないこと、ほとんどの場合、彼が翻訳しようとした対象を裏切ったと、しばしば何の証拠もなしに非難するためだけに彼の名をあげること、彼の作品が満足のいくものであっても彼を侮ること、それは、この上なく貴重な資質やこの上なく稀な美德を蔑むことである⁴⁾。

ラルポーが、ヒエロニムスへのオマージュであるこの一文「翻訳者たちの守護聖人」を彼の翻訳論集の『聖ヒエロニムスの加護のもとに』の巻頭に配したのは、あらためて「翻訳者たちの守護聖人」ヒエロニムスの功績を世の人々に想起させつつ、彼もその一員である翻訳者の存在意義を強く押し出すためであったことは疑いない。

2 ラルポーの翻訳理念と翻訳原理

ここまで『聖ヒエロニムスの加護のもとに』の第1部「翻訳者たちの守護聖人」を見てきたが、これに続く第2部「技術と技能」*L'Art et le Métier*の第1セクション「翻訳について」*«De la Traduction»*に、ラルポーの翻訳理念や翻訳原理、翻訳技法等を記述した論考が収められている⁵⁾。これから主としてこれらの論考のいくつかを取り上げて考察することにすが、これらはすべて、ラルポーの活動時期としては晩年に属する1930年代以降⁶⁾に執筆さ